荒木光太郎文書 766

參考書 第六三號

假決議ニ係ル税法整理法律案目次

一地租條例中改正法律案
一災害地地租特別處分法案
一宅地地價修正法案
一所得税法中改正法律案
附 收入見込計算
一營業税法中改正法律案
附 收入見込計算
一酒造税法中改正法律案
一酒造税法ヲ沖縄縣及東京府下小笠原島伊豆七島ニ施行スル件ニ關スル法律案

荒木光太郎文書 766

一沖縄縣酒類出港税則中改正法律案
一酒母、醪及麹取締法中改正法律案
一酒精及酒精含有飲料税法中改正法律案
一麦酒税法中改正法律案
一明治三十四年法律第十号中改正法律案
一砂糖消費税法中改正法律案
一煉乳原料砂糖戻税法案
一織物消費税法案
一賣薬税法中改正法律案
一砂金採取地税法案
一鑛業法中改正法律案

一登録税法中改正法律案
一取引所税法中改正法律案
一通行税法案　~~附收入見込計算~~
一相続税法中改正法律案　~~附收入見積計算~~
一狩猟法中改正法律案
一印紙税法中改正法律案
一民事訴訟用印紙法中改正法律案
一商事非訟事件印紙法中改正法律案
一行政訴訟書類印紙貼用廢止ニ関スル法律案
一地方税ノ制限ニ関スル法律案
一沖縄縣ニ於ケル舊租免除ニ関スル法律案

荒木光太郎文書 766

地租條例中改正法律案

四十年六月十二日調

荒木光太郎文書 766

地租條例中改正法律案

地租條例中左ノ通改正ス

第一條　地租ハ左ノ税率ニ依リ毎年之ヲ賦課ス

宅　地　　地價百分ノ二箇半

宅地以外ノ土地　　地價百分ノ五箇半

北海道ニ於ケル宅地以外ノ土地ノ地租税率ハ當分地價百分ノ四箇トス

本條例ニ於テ地價ト稱スルハ土地臺帳ニ掲ケタル價格ヲ謂フ

第三條中「郡村宅地、市街宅地」ヲ「宅地」ニ改メ第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

荒木光太郎文書 766

第一類地ヲ第二類地ニ変換シ又ハ地類変換
ト謂フ

第五條中「市街宅地」ヲ「宅地」ニ改ム

第七條中「開墾」又ハ第一類地ヲ第二類地ニ変換ヲ「地類変換又ハ開墾」ニ改ム

第十條 地目ヲ変換シ又ハ地類ヲ変換シタルトキハ政府ニ届出ヘシ
地目ヲ変換シ又ハ地類ヲ変換シタルトキハ直ニ其ノ地價ヲ修正ス但シ第十六條第六項ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十條ノ二及第十條ノ三ヲ削ル

第十一條中及第十六條中「地方廳」ヲ「政府」ニ改ム

第十二條 地租ハ左ノ期限ニ依リ之ヲ徴收ス

一 宅地

第一期	其ノ年七月一日ヨリ同七月三十一日限	地租額二分ノ一
第二期	翌年一月一日ヨリ同一月三十一日限	地租額二分ノ一

二 田

第一期	其ノ年十二月一日ヨリ翌年一月十五日限	地租額四分ノ一
第二期	翌年二月一日ヨリ同二月末日限	地租額四分ノ一
第三期	翌年三月一日ヨリ同三月三十一日限	地租額四分ノ一
第四期	翌年五月一日ヨリ同五月三十一日限	地租額四分ノ一

三 其ノ他ノ土地

荒木光太郎文書 766

第一期　其ノ年九月一日ヨリ同九月三十日限　地租額二分ノ一

第二期　其ノ年十二月一日ヨリ同十二月三十日限　地租額二分ノ一

特殊ノ事情アル地方ニシテ前項ノ納期ニ依リ難キモノニ付テハ命令ヲ以テ特別ノ納期ヲ設クルコトヲ得

第十四條　地價ヲ修正シタル土地ニ付テハ其ノ年ヨリ修正地價ニ依リ地租ヲ徴收ス但シ其ノ年ニ係ル地租ノ全部又ハ一部納付後地價ヲ修正シタルトキハ翌年ヨリ修正地價ニ依リ地租ヲ徴收ス

第十六條第二項ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ地類變換ヲ為シタル後五年以内ニ開墾シタルモノニ在リテハ其ノ成功ノ部分ニ對シ直ニ其ノ地價ヲ修正ス

附則

地租條例之ヲ廢止ス
本法施行前地目ヲ變換シ又ハ地類ヲ變換シタル土地ニ
シテ地價ヲ修正セサルモノハ本法施行ノ際其ノ地價ヲ修正
シ明治四十二年分地租ヨリ修正地價ニ依リ地租ヲ徴收ス
本法施行前地目ヲ變換シ地價ヲ修正シタル土地ニシテ
修正地價ニ依リ地租ヲ徴收スルニ至ラサルモノニ付テハ明
治四十二年分地租ヨリ修正地價ニ依リ地租ヲ徴收ス
明治二十四年法律第二號明治三十年法律第五號及
明治三十二年法律第六十二號ハ之ヲ廢止ス

災害地地租特別處分法案

第一條 災害又ハ天候不順ニ因リ府縣及北海道ノ全部又ハ一部ニ亘リ收穫皆無ニ帰シタル田畑ノ地租ニ付テハ十年以内ノ期間ヲ以テ年賦延納ヲ許可スルコトヲ得

第二條 前條ニ依リ年賦延納ノ許可ヲ受ケタル者其ノ延納期間内ニ於テ同一田畑ノ地租ニ付再度延納ノ許可ヲ受クルニ至リタルトキハ未納ニ係ル前ノ延納年賦金ハ之ヲ免除スルコトヲ得

第三條 本法ニ依リ延納ノ許可ヲ受ケントスル者ハ被害現状ノ存スル間ニ於テ其ノ事實ヲ證明シテ政府ニ出願スヘシ

第四條　本法ニ依リ延納ヲ許可シタル地租ハ法律上総テノ納税資格中ヨリ之ヲ控除セス延納年賦金ヲ免除シタルトキ亦同シ

第五條　本法ニ依リ被害調査中ハ地租ノ徴収ヲ猶豫ス

附　則

明治三十六年法律第三號ニ依リ年賦延納ノ許可ヲ受ケタルモノハ本法ニ依リ許可ヲ受ケタルモノト看做ス

明治三十四年法律第二十七號及明治三十六年法律第三號ハ之ヲ廃止ス

宅地地價修正法案

四十年六月十二日調

荒木光太郎文書 766

宅地地價修正法案

第一條　本法ニ於テ宅地ト稱スルハ郡村宅地及市街宅地ヲ謂フ

第二條　宅地ノ現在地價ハ本法ニ依リ之ヲ修正ス

第三條　宅地ノ修正地價ハ本法ニ依リ定メタル賃貸價格ノ十倍トス但シ賃貸價格ノ十倍カ現在地價ノ二十倍ヲ超ユルトキハ現在地價ノ二十倍ヲ以テ其ノ地價トス

本法ニ於テ賃貸價格ト稱スルハ貸主カ公課、修繕費其ノ他土地ノ維持ニ必要ナル經費ヲ負擔スル條件ヲ以テ之ヲ賃貸スル場合ニ於テ貸主ノ收得スヘキ金額ヲ謂フ

第四條 宅地ノ賃貸價格ハ宅地賃貸價格調査委員
會ノ調査ニ依リ政府之ヲ決定ス
政府ハ調査委員會ノ決議ヲ不當ト認ムルトキハ之ヲ再
調査ニ付ス
左ノ場合ニ於テハ政府ニ於テ宅地ノ賃貸價格ヲ決定ス
一 調査委員會成立セサルトキ
二 調査委員會ノ調査ニ付シタル日ヨリ六十日以内ニ調
査結了セサルトキ
三 調査委員會ノ再議ニ付スルモ其ノ決定仍不當ナ
認ムルトキ
四 調査委員會ノ再議ニ付シタル日ヨリ二十日以内ニ調査
結了セサルトキ
第五條 稅務署長ハ所轄内各市町村ニ於ケル宅地ノ賃
貸價格ヲ調査シ宅地賃貸價格調査委員會ニ提
出スヘシ
第六條 各稅務署所轄内ニ宅地賃貸價格調査委員
會ヲ置ク但シ稅務署所轄内ニ市制ヲ施行スル地方ヲ包含
スルトキハ市制ヲ施行スル地方ト其ノ他ノ地方トニ區別シテ
之ヲ置ク
調査委員ノ定數ハ十人トス但シ地方ノ状況ニ依リ命令ヲ
以テ之ヲ増減スルコトヲ得
第七條 調査委員ハ調査委員選擧人之ヲ選擧ス

調査委員ニ選ハレタル者ハ正當ノ事故アルニ非サレハ之ヲ辭スル
コトヲ得ス
調査委員ハ其ノ職務ノ終了ニ因リテ解任ス
第八條 調査委員選擧人ノ定数ハ其ノ選擧區域内ニ
於テ宅地ノ地租ヲ納ムル義務アル者五十人ニ付一人トス但シ
義務者千人以上ナルトキハ二十人ニ止メ義務者五十人未満
ナルトキハ一人トス
第九條 調査委員ノ選擧區域ハ調査委員會ヲ置クヘキ
區域ニ依リ調査委員選擧人ノ選擧區域ハ市町村ノ
區域ニ依ル
第十條 選擧執行ノ日ニ於テ現ニ地租名寄帳ニ宅地地
租納税者トシテ登録セラレタル者ハ當該選擧區域内ニ
於テ調査委員選擧人ヲ選擧シ又ハ調査委員若ハ調
査委員選擧人ニ選擧セラルルコトヲ得但シ左ニ記載
スル者ハ此ノ限ニ在ラス
一 無能力者
二 家資分散又ハ破産ノ宣告ヲ受ケ其ノ確定シタルトキ
ヨリ復權ノ決定確定スルニ至ル迄ノ者
三 國税滞納處分ヲ受ケタル後一箇年ヲ經サル者
四 剥奪公權者停止公權者
五 禁錮ノ刑ノ宣告ヲ受ケタルトキヨリ其ノ裁判確定ス
ルニ至ル迄ノ者

第十一條 調査委員選擧人又ハ調査委員ノ選擧又ハ調
査委員會ノ會議ニ関スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
第十二條 税務署長ハ其ノ決定シタル價額帳簿ニ依リ修
正地價ヲ定メ之ヲ市町村長ニ通知スヘシ
市町村長前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ市役所又ハ町村役
場ニ於テ二十日間其ノ市町村内ニ於テ宅地ノ地租ヲ納ムル
義務アル者ノ縦覧ニ供スヘシ
第十三條 宅地ノ地租ヲ納ムル義務アル者又ハ其ノ納税管
理人修正地價ニ不服ナルトキハ縦覧期間満了ノ日ヨリ
三十日以内ニ税務監督局長ニ異議ノ申立ヲ為スコトヲ得
第十四條 前條ノ申立アリタルトキハ税務監督局長ハ大藏大臣ノ
認可ヲ得修正地價ヲ決定シ之ヲ異議申立者ニ
通知スヘシ
第十五條 本法ニ依ル地價ノ修正ニ付テハ訴願又ハ
行政訴訟ヲ為スコトヲ得ス
第十六條 本法中市トアルハ東京市、京都市、大阪
市北海道及沖縄縣ニ在リテハ區、町村トアルハ町村
制ヲ施行セサル地方ニ在リテハ戸長、間切長、島長
ノ職務ヲ行フ區域トス

附則

第十七條 本法ニ依リ地價ヲ修正シタル宅地ニ付テハ明
治四十二年分ヨリ修正地價ニ依リ地租ヲ徴收ス

荒木光太郎文書 766

第十八條　荒地免租年期又ハ低價年期ニ有スル宅地ニ付テハ本法ニ依リ地價ノ修正ヲ爲サス年期明ニ至リ類地比準ニ依リ其ノ地價ヲ修正ス

荒地免租年期ヲ有スル宅地ニシテ低價年期ヲ許可セラレタルトキハ其ノ年期明ニ至リ前項ノ規定ヲ適用ス

第十九條　本法施行前耕地整理法又ハ明治三十年法律第三十九號ニ依リ耕地ノ整理又ハ土地ノ改良ニ着手シ未タ事業成功ニ至ラサル地區内ニ在ル宅地ニ付テハ本法ニ依リ地價ノ修正ヲ爲サス事業成功ニ至リタルトキ其ノ地區外ノ類地ノ比準ニ依リ其ノ地價ヲ修正ス

第二十條　開墾着手後九年ヲ經過セサル宅地又ハ鍬下年期地價据置年期ヲ有スル宅地ニ付テハ本法ニ依リ地價ノ修正ヲ爲サス

第二十一條　第十八條乃至第二十條ノ場合ニ於テ地租ヲ徵收スル宅地ニ付テハ其ノ修正地價ニ依リ地租ヲ徵收スルニ至ル迄左ノ税率ニ依リ地租ヲ徵收ス

一　北海道ノ宅地　　地價百分ノ四箇

二　其他府縣ノ宅地　　地價百分ノ五箇年

荒木光太郎文書 766

所得税法中改正法律案

所得税法中左ノ通改正ス

第三條 所得税ハ左ノ税率ニ依リ之ヲ賦課ス

第一種 法人ノ所得

甲 株主二十一人以上ヲ以テ組織シタル株式會社又ハ株主及社員ノ數二十一人以上ヲ以テ組織シタル株式合資會社 千分ノ七十五

乙 其ノ他ノ法人 所得金額ヲ左ノ各級ニ區分シ其ノ各區分ニ對シ遞次ニ各税率ヲ適用ス

五百円以下ノ金額 千分ノ十五

五百円ヲ超ユル金額 千分ノ二十

荒木光太郎文書 766

七百円ヲ超ユル金額	千分ノ二十五
千円ヲ超ユル金額	千分ノ三十
千五百円ヲ超ユル金額	千分ノ四十
二千円ヲ超ユル金額	千分ノ五十
三千円ヲ超ユル金額	千分ノ六十
四千円ヲ超ユル金額	千分ノ七十二
五千円ヲ超ユル金額	千分ノ八十四
七千円ヲ超ユル金額	千分ノ九十六
一万円ヲ超ユル金額	千分ノ百九
一万五千円ヲ超ユル金額	千分ノ百二十二
二万円ヲ超ユル金額	千分ノ百三十六
二万五千円ヲ超ユル金額	千分ノ百五十
三万円ヲ超ユル金額	千分ノ百六十五
四万円ヲ超ユル金額	千分ノ百八十
五万円ヲ超ユル金額	千分ノ百九十五
六万円ヲ超ユル金額	千分ノ二百十
七万円ヲ超ユル金額	千分ノ二百二十五
八万円ヲ超ユル金額	千分ノ二百四十
九万円ヲ超ユル金額	千分ノ二百五十五
十万円ヲ超ユル金額	千分ノ二百七十
二十万円ヲ超ユル金額	千分ノ二百八十五
三十万円ヲ超ユル金額	千分ノ三百
四十万円ヲ超ユル金額	千分ノ三百十五
五十万円ヲ超ユル金額	千分ノ三百三十

荒木光太郎文書 766

第二種 此ノ法律施行地ニ於テ支拂ヲ為ス公債社債ノ利子　千分ノ五十

第三種 前各種ニ屬セサル所得　所得金額ヲ左ノ各級ニ區分シ其ノ各區分ニ對シ遞次ニ各税率ヲ適用ス

五百円以下ノ金額	千分ノ十七
五百円ヲ超ユル金額	千分ノ二十三
七百円ヲ超ユル金額	千分ノ三十
千円ヲ超ユル金額	千分ノ四十
千五百円ヲ超ユル金額	千分ノ五十
二千円ヲ超ユル金額	千分ノ六十五
三千円ヲ超ユル金額	千分ノ八十
四千円ヲ超ユル金額	千分ノ九十五
五千円ヲ超ユル金額	千分ノ百十
七千円ヲ超ユル金額	千分ノ百二十五
一万円ヲ超ユル金額	千分ノ百四十
一万五千円ヲ超ユル金額	千分ノ百五十五
二万円ヲ超ユル金額	千分ノ百七十
二万五千円ヲ超ユル金額	千分ノ百八十五
三万円ヲ超ユル金額	千分ノ二百
四万円ヲ超ユル金額	千分ノ二百二十
五万円ヲ超ユル金額	千分ノ二百四十
六万円ヲ超ユル金額	千分ノ二百六十
七万円ヲ超ユル金額	千分ノ二百八十

八万円ヲ超ユル金額	千分ノ三百
九万円ヲ超ユル金額	千分ノ三百二十
十万円ヲ超ユル金額	千分ノ三百四十

前項ノ株主又ハ株主及社員ノ数ハ其ノ事業年度間ノ最少数ニ依ル

戸主及其ノ同居家族ノ所得ハ第三種ニ限リ之ヲ合算シ其ノ総額ニ依リ本條ノ税率ヲ適用ス戸主ト別居スル家族二人以上同居スルトキ亦同シ

第四條 所得ハ左ノ區別ニ依リ之ヲ算定ス

一、第一種ノ所得ハ各事業年度総益金ヨリ同年度総損金前年度繰越金保険責任準備金及保険支払備金ヲ控除シタル金額ニ依ル但シ第二條ニ該當スル法人ノ所得ハ此ノ法律施行地ニ於ケル資産又ハ営業ヨリ生スル各事業年度益金ヨリ同年度損金ヲ控除シタル金額ニ依ル」

二、第二種ノ所得ハ其ノ支払ヲ受クヘキ金額ニ依ル

三、第三種ノ所得ハ左ノ金額ニ依ル

甲 地代、小作料、家賃、配當金、其ノ他資産ヨリ生スル所得

イ、此ノ法律施行地ニ於テ支払ヲ受ケサル公債、社債ノ利子、此ノ法律ニ依リ所得税ヲ課セラレサル法人ヨリ受クル配當金、営業ニ非サル貸金、預金ノ利子ハ其ノ収入豫算年額

ロ、田、畑ノ小作料ハ前三箇年間毎年ノ総収入金額ヨリ必要ノ経費ヲ控除シタルモノノ平均金額

荒木光太郎文書 766

ハ、其ノ他ハ總収入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル
豫算年額

乙 俸給、給料、手當金、歳費、年金、恩給金、其他勤労
ヨリ生スル所得

イ、俸給、給料、手當金、歳費、年金、恩給金ハ収入
豫算額ニ百分ノ七十ヲ乗シタル金額

ロ、其ノ他ハ總収入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル豫
算年額ニ百分ノ七十ヲ乗シタル金額

丙 農業、商業、工業、鑛業、林業、水産業其ノ他資産
及勤労ノ共働ヨリ生スル所得

イ、田、畑耕作ノ所得ハ前三箇年間毎年ノ總収入
金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタルモノノ平均金額
ニ百分ノ八十五ヲ乗シタル金額

ロ、林業所得ハ前年ノ總収入金額ヨリ必要ノ經費ヲ
控除シタル金額ニ百分ノ八十五ヲ乗シタル金額

ハ、其ノ他ハ總収入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル豫
算年額ニ百分ノ八十五ヲ乗シタル金額

前項第一號ノ場合ニ於テ益金中此ノ法律ニ依リ所得税
ヲ課セラレタル法人ヨリ受ケタル配當金及此ノ法律施行地
ニ於テ支拂ヲ受ケタル公債、社債ノ利子アルトキハ之ヲ控
除ス

船舶運送業者ノ船舶倉庫業者ノ倉庫又ハ製造業
者ノ機械ノ減價ハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ經費ト看
做ス

生命保険契約ニ依リ納税義務者ノ支拂フ保険料ハ
百円ヲ超エサル限度ニ於テ第三種ノ所得ヨリ之ヲ控除スルコ
トヲ得但シ同居ノ戸主家族又ハ同居ノ家族ノ支拂フ保
険料ハ之ヲ通算ス

第五條ニ左ノ二号ヲ加フ

八、国債ノ利子

九、乗馬ヲ有スル義務アル軍人カ政府ヨリ受クル馬糧、繋蓄
料、及馬匹保續料

第六條　第三種ノ所得ハ四百円ニ満タサルトキハ所得税ヲ課
セス但シ左ニ掲クル場合ハ此ノ限ニ在ラス

一、第三條第三項ノ場合ニ於テ所得ノ合算額四百円
満ツルトキ

二、所得ヲ算定スヘキ標準金額ノ合算額四百円ニ満ツル
トキ

三、生命保険料控除ノ為四百円ニ満タサルニ至リタルトキ

附則

本法ハ明治四十二年一月一日ヨリ之ヲ施行ス
非常特別税法中所得税ニ関スル規定ハ本法施行ノ日
ヨリ之ヲ廃止ス

荒木光太郎文書 766

営業税法中改正法律案

営業税法中左ノ通改正ス

第一條中「一 舩渠業」「一 土木請負業」ヲ削リ「一 労力請負業」ヲ「一 請負業」ニ「一 公ナル周旋業」ヲ「一 周旋業」ニ「一 代辨業」ヲ「一 代理業」ニ「一 仲買業」ヲ「一 問屋業」ニ改メ「一 印刷業」ノ次ニ「一 出版業」ヲ「一 問屋業」ノ次ニ「一 信託業」ヲ加フ

第三條第二項中「資本金額」ヲ「運轉資本金額」ニ改ム

第四條第二項中「器物、器械」ヲ「物品」ニ「穀物ヲ精白搗碎シ又ハ染物、洗濯」ヲ「染物」ニ改ム

第七條中「印刷業」ノ次ニ「出版業」ヲ加ヘ「土木請負業、労力請負業」ヲ「請負業」ニ改ム

荒木光太郎文書 766

第十條ノ二 営業税ヲ課スヘキ周旋業、代理業、仲立業、問屋業、信託業ハ一箇年報償金額百円以上ノ者トス

第十二條 営業税ハ左ノ課税標準及税率ニ依リ毎年之ヲ賦課ス

業名	課税標準	税率
物品販売業	売上金額	甲種 米、麦、石油、肥料 卸売ハ万分ノ十二 小売ハ万分ノ三十 乙種 羽二重、生絲、綿糸、白木綿、棉花、紙 〃 万分ノ十二 〃 万分ノ四十 丙種 前二種ニ属セサル物品 〃 万分ノ二十 〃 万分ノ五十
	建物賃貸価格	千分ノ七十五
	従業者	一人毎ニ金二円
銀行業 保険業	資本金額	千分ノ二
	建物賃貸価格	千分ノ七十五
	従業者	一人毎ニ金二円
金銭貸付業 物品貸付業	運転資本金額	千分ノ六半
	建物賃貸価格	千分ノ七十五
	従業者	一人毎ニ金二円
製造業	資本金額	千分ノ五
	建物賃貸価格	千分ノ六十
	従業者	一人毎ニ金二円
	従業者ノ内職工労役者	一人毎ニ金五十銭

荒木光太郎文書 766

印刷業 出版業	資本金額 建物賃貸價格 從業者 從業者內職工勞役者	千分ノ五半 千分ノ六十 一人每ニ金二円 一人每ニ金五十錢
運送業、運河業 棧橋業、船舶碇繋場業 貨物陸揚場業	資本金額 從業者	千分ノ六半 一人每ニ金二円
倉庫業	資本金額 建物賃貸價格 從業者	千分ノ二半 千分ノ八十 一人每ニ金二円
鐵道業	收入金額 從業者	千分ノ二十五半 一人每ニ金二円
請負業	請負金額 從業者	千分ノ五半 一人每ニ金二円
寫真業	資本金額 建物賃貸價格 從業者	千分ノ四 千分ノ八十 一人每ニ金二円

荒木光太郎文書 766

席貸業 料理店業	旅人宿業	周旋業 代理業	仲立業 問屋業 信託業
建物賃貸價格 従業者	建物賃貸價格 従業者	報償金額 従業者	報償金額 建物賃貸價格 従業者
千分ノ百五十 一人毎ニ金二円五十銭	千分ノ百 一人毎ニ金二円五十銭	千分ノ五十 一人毎ニ金二円	千分ノ四十 千分ノ七十五 一人毎ニ金二円

営業者ヲ除クノ外従業者中十五歳未満ノ者ニ付テハ前項税率ノ二分ノ一トス

第十五條第一項中「土木請負業、労力請負業」ヲ「請負業」ニ、公十ル周旋業、代辦業、仲立業、仲買業」ヲ「周旋業、代理業、仲立業、問屋業、信託業」ニ改ム

第十六條第二項ヲ削ル

第十七條ノ二　課税標準ト為スヘキ資本金額ハ金銭貸付業及物品貸付業ヲ除クノ外左ノ區別ニ依リ之ヲ算定ス

一、會社ノ資本金額ハ前年中各月末ニ於ケル出資金額、拂込株式金額、各種ノ積立金額其ノ他積立金ノ性質ヲ有スル資産金額、社債金額及借入金額ノ月割平均額ニ依ル但シ銀行業ヲ営ム會社ノ資本金額ニハ政府ノ預金

ヲ除クノ外前年中各月末ニ於ケル預金ノ四分ノ三ノ月割平
均額ヲ加算シ保険業ヲ営ム會社ノ保険責任準備金ノ
四分ノ一及保険支拂備金ハ資本金額ヨリ之ヲ除算ス
二　個人ノ資本金額ハ他ヨリ借入レタルト否トヲ問ハス前年
中各月末ニ於ケル固定資本及ヒ運轉資本ノ月割平均
額ニ依ル但シ固定資本ハ直接ニ営業ノ用ニ供スル土地、
建物、築造物、船舶、器具、器械ノ見積價格ヲ以テ
之ヲ計算ス
金錢貸付業及物品貸付業ノ課税標準ト為スヘキ運
轉資本金額ハ他ヨリ借入レタルト否トヲ問ハス前年中各
月末ニ於ケル運轉資本ノ月割平均額ニ依リ之ヲ算定
ス但シ物品貸付業ノ運轉資本ハ貸付スヘキ物品ノ見積價
格ヲ以テ之ヲ計算ス

會社ニ於テ本法第一條ニ掲クル營業ト同條ニ掲ケサル營業
トヲ兼營スルトキハ第一項第一号ニ依リ算定シタル資本金額ヲ
リ本法第一條ニ掲ケサル營業ニ對スル見積資本金額ヲ控除
シタルモノヲ以テ課税標準ト為スヘキ資本金額トス

第十八條　建物賃貸價格ハ貸主カ公課、修繕費、保険料、
其ノ他土地又ハ建物ノ維持ニ必要ナル經費ヲ負擔スル條件
ヲ以テ店舗其ノ他營業用ノ土地建物ヲ賃貸スル場合ニ於テ
貸主ノ收得スヘキ金額ヲ謂フ但シ同一區域内ニ在ル住居用
其ノ他ノ土地建物ニシテ間接ニ營業ニ使用スルモノハ營業用ト
シテ計算ス

第十九條中但書ヲ削ル

第二十一條第二項中「船渠業」ヲ削リ「印刷業」ノ次ニ「出版

荒木光太郎文書 766

業」ヲ加フ

附　則

本法ハ明治四十二年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

非常特別税法中営業税ニ関スル規定ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廃止ス

酒造税法中改正法律案

酒造税法中左ノ通改正ス

第四條第一項ヲ左ノ通改ム

酒類ヲ製造スル者ニハ其ノ造石数ニ應シ左ノ割合ヲ以テ造石税ヲ課ス

第一種　酒精分二十度以下ノ清酒、濁酒、白酒及酒精分三十度以下ノ味淋、焼酎　一石ニ付　金十七圓

第二種　酒精分三十五度以下ノ焼酎　一石ニ付　金二十圓

第三種　酒精分四十度以下ノ焼酎　一石ニ付　金二十二圓

第四種　酒精分四十五度以下ノ焼酎

第五種

酒精分二十度ヲ超ユル清酒、濁酒、白酒、酒精分三十度ヲ超ユル味淋及酒精分四十五度ヲ超ユル焼酎　一石ニ付　金二十五圓

一石ニ付　酒精分一度毎ニ　金八十五銭

第五條第一項中「清酒ハ百石濁酒ハ五十石焼酎ハ五石」ヲ「清酒ハ二百石濁酒ハ百石白酒ハ二十石味淋ハ三十石焼酎ハ十石」ニ改ム

第七條　第三十條ノ二ニ依リ酒類製造ノ免許ヲ取消シタルトキ又ハ酒類ヲ製造スル者納税保證物ノ免除ヲ得ズシテ保證物ノ提供ヲ為サザルトキハ前條ノ納期ニ拘ハラズ造石税ノ全部又ハ一部ヲ徴收スルコトヲ得

前項ノ場合及國税徴收法第四條ノ一ニ依リ造石税ヲ徴收スル場合ニ於テハ納税ノ擔保トシテ酒類ヲ差押ユルコトヲ得

第二十二條　免許ヲ受ケズシテ酒類ヲ製造シタル者ハ三十圓以上五千圓以下ノ罰金ニ處シ仍其製造ニ係ル酒類及其ノ容器、器具、器械ヲ没收ス

前項ノ酒類ニ付テハ第六條ノ納期ニ拘ハラズ其ノ造石税ヲ徴收ス

第三十條二　第二十四條乃至第二十八條ニ依リ處罰又ハ處分セラレタル者ニ對シテハ政府ハ酒類製造ノ免許ヲ取消スコトヲ得

第三十八條削除

第三十九條　此ノ法律ノ施行セザル地ニ於テ製造シタル酒類ハ此ノ法律施行又ハ此ノ法律ト同一ノ税率ヲ有スル法規ヲ其ノ地ニ於テ施行スル迄ハ此ノ法律施行地ニ移入スルコトヲ得ズ犯ス者ハ其ノ酒類ノ石數ニ應ジ第四條ノ税率ニ從ヒ算出シタル税額五倍ニ相當スル罰

金ニ處ス但シ五十圓ニ下ルコトヲ得ス
前項ノ酒類及其ノ容器ハ何人ノ所有ニ屬スルヲ問ハス之ヲ沒收ス

附則

本法ハ明治四十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス
本法施行前酒類製造ノ免許ヲ受ケタル者ニ對シ第五條第二項ヲ適用スル場合ニ於テハ第五條第一項ノ制限石數ハ仍舊法ノ規定ニ依ル但シ明治四十四酒造年度以降ハ此ノ限ニ在ラス
非常特別税法中酒造税法ニ依ル酒類ニ關スル規定ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

酒造税法ヲ沖繩縣及東京府下小笠原島伊豆七島ニ施行スル件ニ関スル法律案

第一條 沖繩縣及東京府下小笠原島伊豆七島ニ明治四十一年十月一日ヨリ酒造税法ヲ施行ス
第二條 沖繩縣及東京府下小笠原島伊豆七島ニ於テハ酒造税法第四條ニ依ル造石税ハ當分其ノ半額トス
第三條 東京府下小笠原島伊豆七島ニ於テ製造シタル酒類ハ之ヲ帝國内ノ他ノ地方ニ移出スルコトヲ得ス犯ス者ハ其ノ石數ニ應シ酒造税法第四條ノ税率ニ從テ算出シタル税額五倍ノ罰金ニ處ス但シ五十圓ニ下ルコトヲ得ス
前項ノ酒類及其ノ容器ハ何人ノ所有ニ屬スルヲ問ハス之ヲ沒收ス
第四條 舊慣ニ依リ徴收スル沖繩縣酒造免許税ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

荒木光太郎文書 766

第五條　舊慣ニ依リ酒造ノ免許ヲ受ケタルモノニシテ本法施行後引續キ酒類ヲ製造スル者ハ酒造税法ニ依リ免許ヲ受ケタル者ト看做ス
前項ノ製造者ニハ當分酒造税法第五條第二項ノ規定ヲ適用セス

沖繩縣酒類出港税則中改正法律案

沖繩縣酒類出港税則中左ノ通リ改正ス
第一條中「第四條ノ税率ニ依リ」ヲ「第四條ニ依ル造石税ノ半額」ニ改ム

附則

本法ハ明治四十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ酒造税法ニ依リ造石税ヲ課セラレサル酒類ニ付テハ本法ヲ適用セス
非常特別税法中沖繩縣酒類出港税ニ関スル規定ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

酒母醪及麴取締法中改正法律案

酒母醪及麴取締法中左ノ通改正ス

第九條　免許ヲ受ケスシテ酒母醪若ハ麴ヲ製造シタル者
又ハ第七條若ハ第八條ニ違反シタル者ハ三十圓以上五百圓以
下ノ罰金ニ處シ仍其ノ製造ニ係ル酒母醪又ハ麴及其ノ
容器、器具、器械ヲ沒收ス

前項ノ酒母醪ハ濁酒ト看做シ酒造税法ニ依リ其ノ總石數
ニ對シ直ニ造石税ヲ徴收ス

第二十二條　本法ヲ施行セサル地ニ於テ製造シタル酒母醪又ハ麴
ハ之ヲ本法施行地ニ移入スルヲ得ス犯ス者ハ三十圓以上五百圓以
下ノ罰金ニ處シ仍其ノ酒母、醪、麴及其ノ容器ハ何人ノ所有
ニ屬スルヲ問ハス之ヲ沒收ス

附則

酒精及酒精含有飲料税法中改正法律案

酒精及酒精含有飲料税法中左ノ通改正ス

第二條中「金七十五錢」ヲ「金八十五錢」ニ「金十六圓」ヲ「金十八圓」ニ改ム

第五條ノ二　政府ハ其ノ年三月ヨリ翌年二月迄ノ一箇年度間ノ製造石數酒精ニ在リテハ五十石酒精ヲ含有スル飲料ニ在リテハ十石以上ニ非サレハ製造ノ免許ヲ與ヘス

酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料製造ノ免許ヲ受ケタル者前項ノ制限石數以上ノ製造ヲ爲サヽリシトキハ變災其ノ他已ヲ得サル事故ニ因ルコトヲ證明スルニ非サレハ制限石數ニ相當スル造石税ヲ課ス但シ其ノ製造セサリシ石數ニ對スル造石税ハ一石金十八圓ノ割合ニ依ル

第六條ニ左ノ一項ヲ加フ

本法ハ明治四十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

荒木光太郎文書 766

前條第二項ニ依ル造石税ハ翌年三月末日迄ニ之ヲ納ムヘシ但シ廢業ノ場合ニ於テハ廢業後三十日以内トス

第七條　第二十一條ノ二ニ依リ酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料製造ノ免許ヲ取消シタル場合及國税徴收法第四條ノ一ニ依リ造石税ヲ徴收スル場合ニ於テハ納税ノ擔保トシテ酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料ヲ差押フルコトヲ得

第十五條中「罰金ニ處ス但シ五十圓ヲ下ルコトヲ得ス」ヲ「罰金ニ處シ仍其ノ製造ニ係ル酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料及其ノ容器、器具、器械ヲ没收ス但シ罰金ハ三十圓ヲ下ルコトヲ得ス」ニ改ム

第二十一條ノ二　第十六條乃至第十八條ニ依リ處罰又ハ處分セラレタル者ニ對シテハ政府ハ酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料製造免許ヲ取消スコトヲ得

第二十七條　本法ヲ施行セサル地ニ於テ製造シタル酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料ハ本法又ハ本法ト同一ノ税率ヲ有スル法規ヲ其ノ地ニ於テ施行スル迄本法施行地ニ移入スルコトヲ得ス犯ス者ハ其ノ石數ニ應シ第二條ノ税率ニ從テ算出シタル税額五倍ニ相當スル罰金ニ處ス但シ五十圓ヲ下ルコトヲ得ス

前項ノ酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料及其ノ容器ハ何人ノ所有ニ屬スルヲ問ハス之ヲ没收ス

附則

本法ハ明治四十二年三月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料製造免許ヲ受ケタル者ニハ明治四十五年二月末日迄ハ第五條ノ二第二項ノ規定ヲ適用セス

[illegible]料税法中酒精又ハ酒精含有飲料税ニ關スル規定ハ本法

荒木光太郎文書 766

施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

麥酒税法中改正法律案

麥酒税法中左ノ通改正ス

第一條第三項中「十分ノ三以内ノ米」ヲ「十分ノ五以内ノ米、玉蜀黍又ハ砂糖」ニ改ム

第三條中「金七圓」ヲ「金八圓」ニ改ム

第三條ノ二　政府ハ其ノ年三月ヨリ翌年二月迄ノ一箇年度間ノ製造石數千石以上ニ非サルハ麥酒製造ノ免許ヲ與ヘス

麥酒製造ノ免許ヲ受ケタル者前項ノ制限石數以上ノ製造ヲ爲サザリシトキハ變災其ノ他已ムヲ得サル事故ニ因ルコトヲ證明スルニ非サレハ制限石數ニ相當スル麥酒税ヲ課ス

第四條ニ左ノ一項ヲ加フ

前條第二項ニ依ル麥酒税ハ翌年三月末日迄ニ之ヲ納ムヘシ但シ廢業ノ場合ニ在テハ廢業後二十日以内トス

荒木光太郎文書 766

第五條 第十七條ノ二ニ依リ麥酒製造ノ免許ヲ取消シタル場合又
　國税徴收法第四條ノ一ニ依リ麥酒税ヲ徴收スル場合ニ於テハ納
　税ノ擔保トシテ麥酒ヲ差押フルコトヲ得
第十一條中「罰金ニ處ス但シ五十圓ヲ下ルコトヲ得ス」ヲ「罰金ニ
處シ仍其ノ麥酒及其ノ容器、器具、器械ヲ沒收ス但シ罰金ハ
三千圓ヲ下ルコトヲ得ス」ニ改ム
第十七條ノ二 第十二條乃至第十四條ニ依リ處罰又ハ處分セラ
レタル者ニ對シテハ政府ハ麥酒製造ノ免許ヲ取消スコトヲ
得
第二十三條 本法ヲ施行セサル地ニ於テ製造シタル麥酒ハ本法又
ハ本法ト同一ノ税率ヲ有スル法規ヲ其ノ地ニ於テ施行スル迄ハ
本法施行地ニ移入スルコトヲ得ス犯ス者ハ其ノ石數ニ應シ第
三條ノ税率ニ從テ算出シタル税額五倍ニ相當スル罰金ニ處
ス但シ五十圓ヲ下ルコトヲ得ス
前項ノ麥酒及其ノ容器ハ何人ノ所有ニ屬スルヲ問ハス之ヲ沒收ス

附則

本法ハ明治四十二年三月一日ヨリ之ヲ施行ス
本法施行前麥酒製造ノ免許ヲ受ケタル者ニハ明治四十五年二
月末日迄ハ第三條ノ二第二項ノ規定ヲ適用セス
非常特別税法中麥酒税ニ關スル規定ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ
廢止ス